

統合産婦人科学研究コアセンター

産婦人科の医療を取り巻く話題は多い。たとえば、最近では子宮頸がん予防HPVワクチンの副作用、風疹感染による先天性風疹症候群、卵子提供による体外受精や出自を知る権利、代理懐胎などの社会的、倫理面の問題は、いつもマスメディアで世間を賑わせている。これら諸問題を、論理的に解決することが、常に産婦人科研究には求められている。すなわち、少子化、晩婚化の社会事情に対応し、変

八重樫伸生コアセンター長が紹介



わりゆく環境、社会、時代に適応した産婦人科研究と成果が求められている。

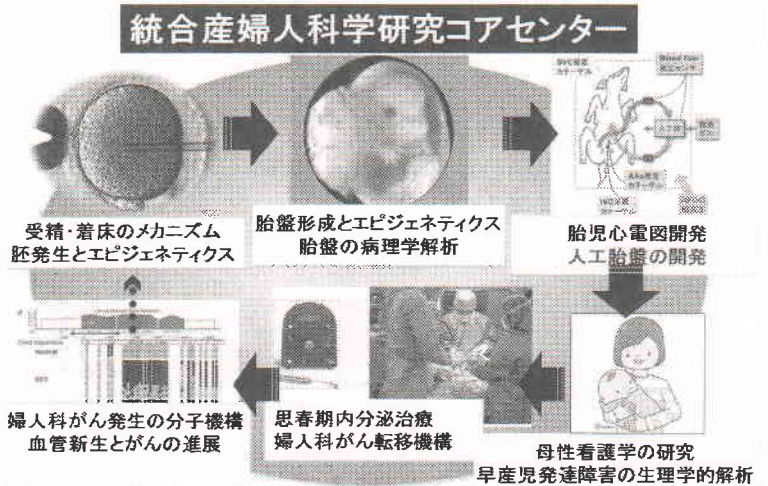
本来産婦人科学とは、女性の生涯と次世代をトータルサポートするものであり、研究分野は幅広いものの、従来は一つの教室で、ある程度研究テーマを絞りつつも包括的に行われてきた産婦人科領域の研究が、大学院独立法人化以降、複数の分野に分かれて行われるようになった。それぞれで情報交換の方策を行ってきているものの、専門化しすぎた弊害で、周りでやっていることがよくわからず時に情報共有の不足から人的・経済的な困難に陥り、最大限の効果を得られないまま

産婦人科全般の包括的研究組織  
研究領域融合で形成

になっている。

さらにそれぞれの研究グループで研究指導体制が確立されている現状が境界領域の研究を行う上で障害となり、融合的あるいは包括的な研究を行っていく状況にある。その結果、残念ながら、最近の産婦人科領域の研究は低迷している感がある。多忙な産婦人科診療の中、研究も同時進行しなければならぬが、圧倒的なマンパワー不足がその一因となっている。将来の産婦人科学研究を飛躍的に発展させ世界のトップレベルの研究を展開するためには、人的、経済的資源の効果的運用も考慮しなければならぬ。

そこで、統合産婦人科学研究コアセンターでは、産婦人科学・助産学・女性医学・生殖基礎医学などと全体を俯瞰的に見渡すこと



卵、精子から成人まで、女性の生涯について、発生、分化から成長、癌化、老化に至る包括的研究基盤を構築し発展させる。

ができる体制を構築し、各研究チームの深い専門領域間の融合と、大きく広がったすそ野を俯瞰する専門領域間の再統合の2点を産婦人科学研究で行う体制を構築するために創設された。各研究を融合することにより、お互いの分野の弱点を補完するだけでなく、利点を高め合い、さらなる研究の発展を期待できる。

具体的な取り組みとして、定例早朝合同研究ミーティング(毎週)、若手主催の産婦人科研究基盤セミナー(毎月)、統合産婦人科研究合同セミナー(毎月)、合同シンポジウム(毎年)を実施、研究発表・討論による意見交換と情報共有などによる人的交流の場を提供し

この取り組みによる成果は、最近着実に創出されている。また、新たな連携研究、横断研究を発掘、発展させるため、今後工夫が必要である。さらに、国内外から有望な研究者を募集し、産婦人科領域の研究をさらに活性化させ、将来世界に指導的研究者を輩出することを目指し、生命科学の謎を解明することに挑戦していく。

ている。

その中で、最も留意している点は、形式ではなく結果(成果)に連結させることである。真に実りある研究へと発展させるため、全ての会合は自主参加で、強制ではない。おのおの自主的な向上心の発展を促すことで、個々の研究者のスキルアップに努めている。お互いが、背景や立場を気にせず、自由に討論できる環境を作り、自由に積極的に交流が行えることに注力している。

■統合産婦人科学研究コアセンターホームページ  
http://www.art.med.tohoku.ac.jp/introduction/women/index.html